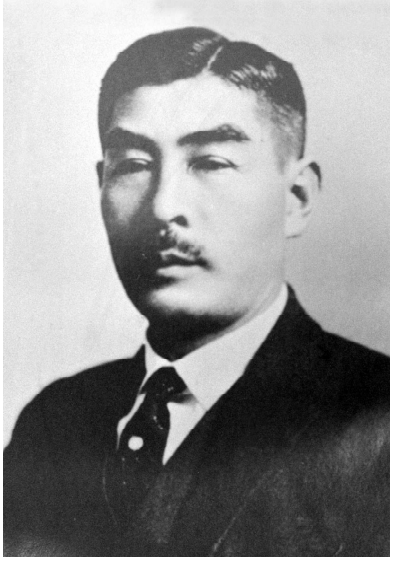
松永安左工門（まつながやすざえもん）

生きているうちに鬼と云われても死んで仏となりて返さん
－電力民営９電力体制の実現－



松永安左工門（1875 ～ 1971）
出典：『名古屋火力発電所写真帖』

■生い立ち

松永安左工門は1875（明治8）年、壱岐（いき）島（現在：長崎県壱岐市石田町）に二代目松永安左工門の長男として生まれた。幼名を亀之助といい、生家は京阪神地方との交易、酒造業、呉服・雑貨、穀物の取り扱い、水産業（鰯網捕鯨網元）など多くの事業を営み、田地を所有する大事業家であった。祖父の初代安左工門は、裸一貫から一代でこれだけの事業と資産を築き上げた。

松永は「学問のすすめ」を読んで感奮興起し、慶應義塾に進むことを独り決めしていた。そして、両親・親戚などの反対にハンガーストライキの手段をとり、しぶしぶ承諾を得て、1889年、15歳の時に上京し慶応義塾に入学，学問を励んでいる1893年、父が38歳で亡くなったので三代目安左工門を襲名し、壱岐で家業を継いだ。しかし、学校が中途で、このまま壱岐で終始することを恐れ、土地だけを継承し、家業を譲渡して慶応義塾に復学。1898年、松永安左工門は福沢諭吉の記念帳に“わが人生は闘争なり”と書き、24歳の時に慶応義塾を卒業した。

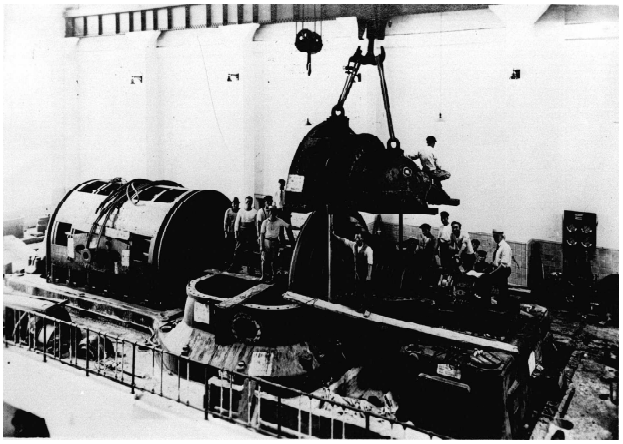
■慶応義塾から“わが人生は闘争なり”の実業界へ

初めて就職した日本銀行を1年で退職、次に福沢桃介の経営する丸三商会に入社したが破産、そして「ゼネラルブローカー福松商会」を設立したがこれも倒産、そのうえ自宅も火事で全焼し無一文になったが、心機一転、今後は国家社会に奉仕すること必要であると悟った。

その後、1909（明治42）年に福博電気軌道株式会社を設立（社長：福沢桃介、専務取締役：松永安左工門）、地元の電気事業を合併して創立された九州電灯鉄道の専務取締役に就任、九州のガス会社10社を合併し西部合同ガス会社を設立、社長に就任した。さらに1917（大正6）年に博多商工会議所会頭、同年、福岡市選出の衆議院議員に当選、政友会の代議士として1期勤めた。

東邦電力株式会社は1922年に関西電気、名古屋電灯、九州電灯鉄道が吸収合併し、社名を公募し東邦電力株式会社と商号を変更し創立された。松永安左衛門は副社長、1928年に社長、1940年に会長に就任した。

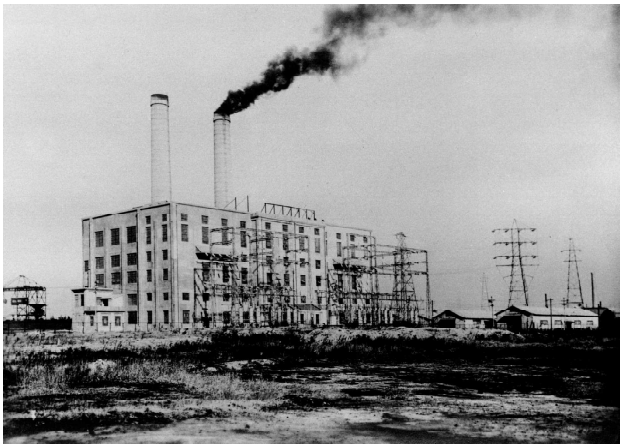
1938（昭和13）年に電力管理施工令が公布され、電力国営化時代に入った。電力国家管理に強く反対していた松永は電力界から手を引いた。



名古屋火力発電所のタービン据え付け工事
出典：『名古屋火力発電所写真帖』

■電気事業再編成、電力民営9電力体制の実現

1945（昭和20）年、終戦ともに連合国総司令部・GHQは経済の民主化、電力再編成を要求した。1949年、当時の吉田首相は電気事業再編成審議会を発足、審議会会長に松永安左工門を選出した。その後紆余曲折を繰返し、最終的に総司令部マッカーサー元帥より「電力再編成の促進に関する書簡」、いわゆるポツダム政令が出された。これは松永案を趣旨とするもので「電力再編成令」「公益事業令」」が公布され、1951年、九電力会社が発足した。



名古屋火力発電所のタービン据え付け工事
出典：『名古屋火力発電所写真帖』

（寺沢安正）